






ついでに

で、はてな、今頃灯の點つて有る筈がないのに、なん  
 でやろ、ア、お鍋や——あんな勤勉な女やで、人の  
 寝静まつてから、綴り物の一つも仕て居る内に晝の疲  
 れで、横になつたが疲勞れて居るので、其のまゝ寝て  
 仕舞ふたのか、うたゝ寝をして風邪を引いたらどうも  
 ならん、まして灯が點つてある。火の用心も悪し、行  
 て起してやらうと、お鍋の都屋へ行て見ると、なんの  
 一、お鍋は起きてよる。鏡臺を出して、兩方にろうそ  
 くが二丁火をつけて、鏡の前にじいとうつぶいてよる  
 ので、この夜の更けてあるのに、鏡を出して何をして  
 よるのやると覗くのと、お鍋が顔をとげるのと一緒や  
 鏡に寫つた顔が  から  へ血みどろになりよ  
 つて、ひや——……  ……

「ウワア……も……し、な……ん……と……云ふ顔を仕なはるね。わて吃驚しましたがな。今晚便所へよう  
 いかん、部屋へ便器を持って上る。」

「これ、そんな事しいなや。」

「コレ、大きな聲を出して、如何したんや。」

「あゝ、旦那さんでござすか。」

「これ旦那さんでござすかや無いで、花街やなし、町家の真中で、夜の更けたアるのに大きな聲を出  
 して」

「これはどうも相濟ません事です。」

「番頭、お前まで若い者と同じやうに如何したのや。」

「へーエ、以後はきつと慎みます。」

「チヨツと話がある。いや他の人はいらん。番頭、お前だけ、こつちへ這入つてお呉れ。」

「もつと此方へ這入つとくれイヤ、外の事やないが、あのお鍋の一件やが。」

「へエ、斯様な事は、成る可くと旦那さんのお耳に入れよまいと思ふて居りましたのでござすが……」

「イヤ、私もとうから知つて居る。妙な女やなア、人が寝静まつたら、二重三重の締りを越へて、何